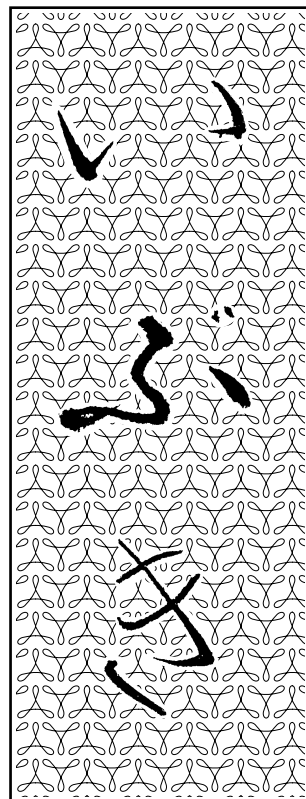


「聖像」a

(教育棟二階に展示中の「隠れキリシタン遺品収集」より)



轍を踏まないために 日本のカトリック教会の反省

宗教学特任教授・宗教主事 小田武彦

一九八一年に来日した教皇ヨハネ・パウロ二世は、広島で「過去を振り返ることは将来に対する責任を担うことです」と訴えました。将来に対する責任を担うために、七十年前に終わった戦争に、日本のカトリック教会がどのように協力していったかを振り返りたいと思います。

一九二九年、新聞各紙は「伊勢神宮の式年遷宮祭に各地のカトリック学校が遥拝式を行わなかったのは大きな社会問題だ」と批判しました。一九三二年に二人のカトリック信者の学生が靖国神社参拝をしなかったことも反キリスト教キャンペーンを煽り、陸軍省は上智大学から配属将校を引揚げてしまいました。

日本の教会指導者たちは、自分たちが「売国奴」ではないことを日本社会に示そうと苦慮していきます。献金を集めてカトリック愛国飛行機を軍に献納し、神社参拝は愛国心のしるしだとする「祖国に対する信者のつとめ」という指針を発表し、天皇に尽くし国の威力を国内外に示すことができるようにという「皇国の為にする祈り」や「戦勝祈願ミサ」が各地で捧げられていきました。

一九三七年、中国各地で戦線を拡大する日本政府から、日本軍と中国東北部のカトリック教会との連絡要員を出せという要請を受けた教会は、盧溝橋事件から三か月後には日本人司祭を現地に派遣しています。

フィリピン、フランス領インドシナやオランダ領インドシナなどを占領する計画を立てた日本軍は、侵攻予定先のキリスト教信者を日本軍に協力させるため、一九四一年八月、宗教宣撫要員を組織するよう教会に命じました。陸軍「宗教宣撫工作部」第一陣は一月二六日に広島の宇品を出港したのち台湾の澎湖島沖で待機し、二月八日の各地への奇襲攻撃開始後に現地入りしました。一九四二年三月には侵攻先政府と日本軍との友好関係を築くために日本人司教が徴用され、同年末には日本人修道女や女性信者によるカトリック女子宗教部隊も戦地での日本語教育に従事し始めました。

世界の平和を願っていても、ひとたび戦争への歩みが始まってしまふと教会も、戦争に協力せざるを得なくなっていくことが読み取れます。戦争がなかったこの七十年の歩みに感謝し、これからも不戦を誓った憲法を守りつつ、国際社会の真の平和のために貢献できるように祈り、すべきことをしていきたいと心から願っております。

キリスト教文化センター活動状況(平成26年度)

今回は2014年4月～2015年3月までの活動を報告します。

2014年度

○新人生オリエンテーション

(4月14日)

○新人生歓迎会(5月13日)

○CC倶楽部第1回

「ワインとキリスト教」

講師…三宅良彦学長

(6月20日)

○CC倶楽部第2回

「ビールとキリスト教」

講師…力石辰也センター長

土居由美氏(7月25日)



さまざまな画家が描いた「最後の晩餐」

- ・ なんでみんなで食事をしているのかな？
- ・ 食卓の上のパンとワインの意味は？
- ・ このあとイエスや弟子たちはどうなるの？
- ・ ユダはどの人かな？どのように描かれている？
- ・ 何で魚が描かれているのかな？
- ・ イエスに寄りかかっている人はだれ？
- ・ 足を洗っている人が描かれたのもあったけど？
- ・ イエスが描かれる位置は？

第3回CC倶楽部で使われたスライドの一部



○機関誌「いぶき」(81号) 発行

10月25日

○キリスト教文化センター講演会

11月14日

「起きよ、光を放て！まことに
お前の光がやってくる。」

～南相馬で見たこと、聞いた
こと、伝えたいこと～

講師…Sr.重藤悠美子

(キリスト教文化センター)

○クリスマス・イルミネーション・病院点灯式及びクリスマスパーティー(11月25日)



○聖マリアンナ医科大学看護専門
学校クリスマスの集い

(12月22日)

これはSandro Botticelliの受胎告知です。
この時のマリアの心情は、
ルカ福音書のどの節を表しているでしょう？

1. マリアはこの言葉に戸惑い、
いったいこの挨拶は何のことかと
考え込んだ。(Lk1:29)
2. 「どうして、そのようなことが
ありえましょうか。
わたしは男の人を知らないのに。」
(Lk1:34)
3. 「わたしは主のはしめです。
お言葉どおり、この身に
成りますように。」(Lk1:38)



▲クリスマス会で出題されたクイズの一部
(正解は「いぶき」の最終ページにあります)



▲キャンドルサービス▼

▲聖母子像の前で



○CC倶楽部第4回
「福島原発事故避難者をサポ
ートする現場から」福島の子ども
たちと家族の苦難と希望」
講師…信木美穂氏(きらきら星
ネット)
(2015年1月16日)



○CC倶楽部第5回
「長崎の教会群とキリスト教関
連の遺産」
講師…岩下光幸氏(キリスト教
文化センター)
(2015年2月27日)

がんばれ、日本。
がんばれ、東北。

Don't give up, Japan
Don't give up, Tohoku

平成26年 キリスト教文化センター講演会

「起きよ、光を放て！
まことにお前の光がやってくる。」

(イザヤ書60節1節)

～南相馬で見たこと、聞いたこと、伝えたいこと～

講師：重藤悠美子(キリスト教文化センター)

日時：2014年11月4日(火曜日) 17時から

場所：教育棟5階 セミナー室1・2

対象：すべての学生・教職員



※写真

ぼくらは忘れようとしているかもしれない。

キリスト教文化センター
ccc@marianna-u.ac.jp
内線4877

※<http://www.commercialappeal.com/news/day-pictures-march-27-2011>から引用。



シスター重藤悠美子(キリスト教文化センター) 講演会

「起きよ、光を放て！」

まことにお前の光がやってくる。」

(イザヤ書60章1節)

～南相馬で見たこと、聞いたこと、伝えたいこと～

シスター重藤悠美子の
講演会に参加して

医学部6年 金澤 実

2011年3月11日14時46分、

私はお世話になった部活の先輩の卒業を祝う為に医学部本館の正面玄関にいた。突然、大きな揺れとともに建物ガシギシと音を立て、私は身の危険を感じ、仲間と一緒に恐怖を覚えたことを今でも忘れずに覚えている。東日本大震災発生から4年もの月日が経った。

講演の中で私は、現在の福島の人々について知ることが出来たような気がする。特に印象に残った活動の一つを紹介したい。福島障害者支援センターの活動の一つである「南相馬ファクトリー」では、原発災害に見舞われた福島県の地からヒマワリの種とともに缶バッジ購入を呼び掛ける活動を行っている。ヒマワリの種を添えているのには理由があり、それはヒマワリが成長に必要な栄養素であるカリウムとセシウムを高い割合で吸収するためである。それによって土壌中のセシウムを減らすことがで

きる。こうした試みが現在、南相馬で行われている。科学で習った周期表でカリウムとセシウムは同属元素であることを思い出しながら、今まさに南相馬で行われている努力が伝わる話だと思った。

そして今回の講演にて、聖マリアンナ医科大学で研修を行うと2年目に必修の地域医療活動で南相馬市立総合病院等研修先として選ぶことができるシステムも知った。私は何も行動せずに今日まで過ごしてきたが、実はこの4年間に活動の場を提供してくれる環境がすでに整備されていることを初めて知った。

今回の講演から、福島県で4年前から途切れることなく辛い思いをしている人々の一面と向き合うことが出来た。東日本大震災を忘れないようにすることも勿論必要だが、本当に必要なことは更にもう一歩踏み込んだ行動のはずだ。正直、私は自分で実行できるような行動を思いつく事ができなかった。しかしながら今回、このようなすばらしい講演会に参加できたことに感謝したい。

医学部6年 小澤 南

シスターから南相馬市の現状や復興、それに関わる人々の話を伺い、私が最も驚いたのは、自分が東日本大震災の被災地の現状をあまりよく理解していなかったという事でした。被災地の様子はマスコミでも頻繁に報道されており、情報としては認識していました。しかし、いまだに除染作業が進ま

ず、家に帰れない方々の想いを真剣に考えてみたことがなかったのです。今回の講演をお聞きして、人々のこれからの生活に対しての意欲を高める取り組みがとても大切なのだと改めて感じました。

そして、被災地で行われている多くの復興活動についても学ぶ事ができました。中でも印象に残ったのは、仮設住宅に野菜を配るボランティアのお話です。風評被害により売れなくなってしまう地元野菜をボランティア団体が集め、

仮設住宅に配るというものでした。風評被害に悩まされる農家の

方々の助けになるだけでなく、直接野菜を渡すというふれあいにやり、震災に遭われた方々の心の痛みを軽減する事が出来るだろうと思いました。そのほかにも、人と人とのつながりを大切にした活動について学び、災害復興においては、人々の助け合いが大切なのだということがわかりました。

シスターは最後に「震災復興に

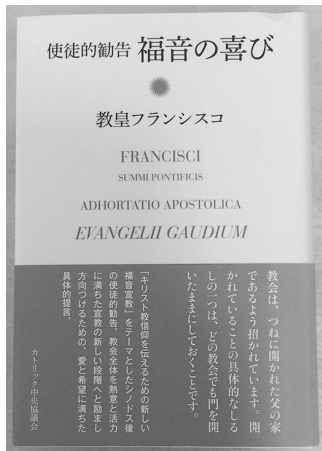
やいました。私たちが東日本大震災の事を思い出し、様々な活動がある事を知り、小さな事からでも何かを実践するという事が、一日でも早い復興への近道なのだと感じました。また、自分たちが災害に見舞われた場合にも、その経験を生かすことができるだろうと思いました。そのような時には、今以上に人と人とのつながりの大切さを感じる事でしょう。今回の講演を機に、私も被災地の復興、支援について考え、関わりを持ちたいと思いました。

□ 本棚から □

次の本を購入しました。皆様のご利用をお待ちしています。

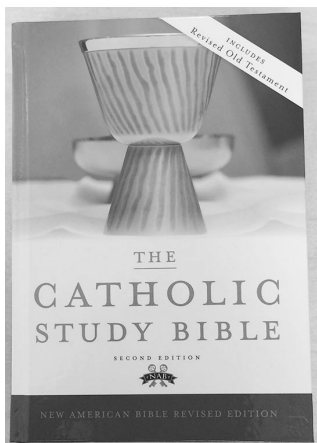
● 教皇フランシスコ

使徒的勧告『福音の喜び』
カトリック中央協議会



● The Catholic Study Bible

Oxford University Press





Christian Culture Club (略称: CC倶楽部) について

キリスト教文化センター長 力石辰也

キリスト教文化センターでは、2014年度から、新しい活動として「キリスト教文化に触れる集い: Christian Culture Club (略称CC倶楽部)」を始めました。このクラブはキリスト教の普及や信仰をめざすのではなく、純粋にキリスト教文化を楽しむことを目的としています。教職員、学生の方

はどなたでも歓迎であり、学内の異業種交流的な役割を担えるようになることも期待しています。西洋を中心としたキリスト教文化は、21世紀の日本にくらす現代の我々にも大きな影響を与えています。我々の専門分野である医学・医療はもちろん、その影響は科学・音楽・美術・文学・建築など、実に幅広い分野に及びます。CC倶楽部では、そのごく一部を、学んだり、楽しんだりすることを目指しています。

記念すべき第1回は、三宅学長に講師をお願いし、「ワインとキリスト教」というタイトルでお話をさせていただきました。三宅学長のワインに関する造詣は深く、ワインの歴史やそれにまつわるエピソードを多数ご紹介いただきました。講演の後は、本物のワインとささやかなつまみを頂きながら、参加者全員がキリスト教文化の一部であるワインを楽しみました。初回のCC倶楽部は、特にアルコール好きの教職員の心をつかんだものと思えました。これに気を良くした我々は、ワインの次はビールだろうということで、第2回は「ビールとキリスト教」という企

画を立てました。現在は本学の非常勤講師でもある土居由美先生に、ビールの歴史やキリスト教との関係を説明して頂くとともに、たくさんある修道院ビールを紹介して頂きました。講演後の懇談会では、特別に準備した修道院ビールはもちろん、ワインもすべてなくなり、参加者のアルコールを通じてキリスト教文化を学ぼうという強い意欲が感じられました。それで以降は左に示すような企画で活動を行ないました。名画「最後の晩餐」を鑑賞しながらその聖書的な背景を学んだり、キリスト教精神に基づいた福島原発事故避難者

の支援活動のお話を聴いたり、あるいは世界遺産に推薦された長崎の教会群について、地元出身である岩下さん(キリスト教文化センター職員)に解説をお願いしたりしました。今後も皆さんの意見を踏まえながら、魅力あるCC倶楽部を企画し、学生・教員・職員が対等の立場で一緒に会話をする機会を提供していきたいと思っています。今後は、本学の通勤・通学事情を考え、懇親会にはアルコールを含まない飲み物(ノンアルコールビールなど)も準備いたします。多数の皆さんの参加をお願い申し上げます。

CC倶楽部の開催歴

- ・ 第1回: ワインとキリスト教
2014/6/20 (金曜日)
講師: 三宅良彦 (学長)
- ・ 第2回: ビールとキリスト教
2014/7/25 (金曜日)
講師: 土居由美
(腎泌尿器外科学・立教大学他非常勤講師)
- ・ 第3回: 聖書が語る最後の晩餐
2014/10/9 (木曜日)
講師: 小田武彦 (特任教授)
- ・ 第4回: 福島原発事故避難者をサポートする現場から
～福島子どもたちと家族の苦難と希望～
2015/1/16 (金曜日)
講師: 信木美穂 (きらきら星ネット共同代表)
- ・ 第5回: 長崎の教会群とキリスト教関連の遺産
2015/2/27 (金曜日)
講師: 岩下光幸 (キリスト教文化センター)

カトリック医療関連学生セミナーに参加して

医学部6年 稲田 享希子

学生5年目にしてやっとの思いで参加できた学生セミナーの今回のテーマは、「小さくされた人に寄り添う」であった。講演会の内容を拝見したところ、小児科や児童養護施設関連の演目であったことから、セミナー参加前の私にとっては「小」＝「小児科」のようなイメージであった。しかし、講演会を拝聴し、そのイメージと認識が誤りであったことに気づかされた。重要なのは「された」という受身の形であり、それはどんな立場の人でも「小さくされ」得るというメッセージであった。

私自身は何不自由なく、大変恵まれた家庭で育ってきた。児童養護施設の子どもたちのように、幼少期に「真つ暗なトンネルに放り込まれ、行き先もわからない」ということは、はつきり言っていなかった。いつでも両親、妹が側にいて寄り添ってくれていた。しかし、そんな私でも、「お先真つ暗」状態になった経験があるのだ。それは、高校を卒業して浪人した際の話である。殆どの友達は志望校に合格し、楽しいキャンパスライフを送っていたが、それとは対照的に、私はいつ抜け出せるかわから

ない日々を送っていたのである。浪人すれば、高校生でも大学生でもない宙ぶらりんの毎日が待っていた。今までの人生、恵まれすぎているなど感じていたが、実際に自分の望んでいたものが満たされない状態は、当時の若くて浅い私にとっては非常に過酷であった。その時までは順調だったが、浪人を機に友人関係、生活形態などの環境がガラリと変わってしまったのだ。私にとって初めての挫折であった。親しくしていた友人は、新鮮な大学生活で忙しくしているのだからということを考えている、連絡を取ることも億劫になり、話すことも体も嫌になり、私は次第に塞ぎ込んでいった。それこそ真つ暗なトンネルの中を歩いている気分だった。それからしばらくと気持ちには内向きになり、しまいには自分で自分を「小さく」していったのだ。今回の講演を拝聴して感じたのは、小さくする原因は何も他者や周りの環境だけにあるわけではない、ということである。小さくする要因は「自分」の中にもあり、私は自分を小さくしすぎて自死まで考えるようになってしまったのだ。それまでは絵を描いた

り、写真を撮ったり、色んな事柄を感じるものが好きだった私は、すべての感覚系を止めてしまいたいとまで思ってしまった。この当時の気持ちは、児童養護施設の子どもたちの「真つ暗なトンネルに放り込まれ、行き先もわからない」という言葉にびつたり当てはまっていた。そんな最悪の状況の中、私がどうやってここまで回復できたのかというと、やはり同じ経験をした友達、先生、そして最後には母の助けがあったからであつた。母に胸の内を伝えられるようになって、少しずつ自分の中で何かが変わってきたのを覚えていよう。母に自分の状態を打ち明けようと思うまで、そして実際に話すまでとても時間がかかった。話してもどうせ……などと考えたこともあつた。しかし、実際に話してみると、母は「その瞬間が嫌ならば、ただ何も考えないでとにかくそこにいるだけでいいんだよ。そうすれば時間はどんどん過ぎていって、自分の考えも変わるから。だからとりあえず生きていなさい。」と。母にこんなことを言わせてしまった私は本当に親不孝者である。浪人させてくれたり、いろいろわがままな内容にも耳を傾けてくれていること、私を取り巻く環境は全て満たされていたのに、自分で自分を小さくしていたこと「だけ」が要因となり、立ち上がるこ

とがしばらくできなかったのだ。虐待する親、虐待された子ども、また家庭環境は整っていない一人て人生を歩んでいる人々、この地球上に存在する人間の誰しもが「小さくされ」得るのだ。そこに歯止めをかけるのが、周りのほんの少しの一言や対応、自分から打ち明けるといふほんのちよつとの自信なのだ、講演会やグループディスカッションを通して再認識させられた。私も、短い人生の中で大変貴重な経験をしたので、これから出会う人々と接していけたらと考えている。

母が言ってくれた、「とりあえず生きていなさい」という言葉は辛い瞬間に思い出す言葉の一つである。そう言ってくれたからこそ、浪人生活も卒業できた。それから、自分の中で気持ちの切り替えができるようになり、疎遠になっていた友人とも、お互いそれぞれの場所 で成長して大きくなり再び出逢うことができた。

これから私が歩む人生の中で、同じような状況、立場、境遇に置かれていて人を見たら、少しでも手を差し伸べられるようになりたい。私が自分を「小さく」していた時に、共に小さくならずに「大きい」ままだった母の存在を忘れずに。



国宝大浦天主堂 (こくほうおおうらてんしゅどう) 水彩 F4

文と絵 岩下光幸 (キリスト教文化センター)

この天主堂は、今からちょうど**150年前の1864年**、幕末の開国にともない長崎に居住する外国人のために建設されたもので、当時は「フランス寺」と呼ばれておりました。また、豊臣秀吉の禁教政策により、長崎の西坂で殉教した**(1597年) 26聖人**を記念して建てられた日本最古の教会堂でもあります。

建堂に携わったフランス人のプティジャン神父は、当時不可能であろうと思われていた信徒発見にかな期待を抱き、教会堂正面には日本人にわかるように「天主堂」という文字を掲げました。天主堂の公開から**1ヵ月**後、これを見て潜伏していた浦上のキリスト教徒が天主堂を訪ね、プティジャン神父に、「私はあなたと同じ心、サンタ・マリアの御像はどこ？」と命がけで信仰を告白しました。**250年**にも及ぶ厳しい弾圧にもかかわらず、信仰を守り続けたキリスト教徒が存在したことは、世界中をあっと思わせ、歴史・宗教史上の奇跡とも呼ばれています。

浦上の信徒が目にした聖マリア像は、現在も聖堂内右前方に安置されています。美しいステンドグラスとともに歴史を物語る大浦天主堂は、「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」の一つとして来年には世界遺産に登録される予定です。

キリ文便り (編集後記)

桜、花みずき、つつじ、紫陽花、コスモス、椿…と春夏秋冬マリァンナのキャンパスを彩る自然界の営みに包まれて、あっという間に新しい一年がめぐってきました。昨年は長年の希望だった『キリスト教文化にふれる集い』(略称CC倶楽部)を開催することができ、画期的な一年だったように思います。教養としてのキリスト教をいろいろな角度から学び、軽食をつまみながら気楽に疑問などを語り合うという企画はたくさんの方々のご参加を得て、少しずつ軌道にのってきたように思います。「ワイン」や「ビール」にはじまり「最後の晩餐」や世界遺産登録を待つ「長崎教会群」などに触れて、私達の視野もひろがったようです。今年も楽しい企画を続けていきます。今号に寄稿してくださった皆様に心から感謝申し上げます。(重藤悠美子)

ページ3の答え②

発行 聖マリァンナ医科大学

キリスト教文化センター

〒216-8511

川崎市宮前区菅生 2-16-1

〇四四(九七七) 八二二(代)

編集 力石 辰也

印刷 (株)城南印刷センター